

【 復活のトロパリ 第6調 】

てんしのぐんなんぢのはかにあらわれしに、  
 天使 軍 爾 墓 現

ばんぺいしせしもののごとし、マリアはか  
 番 兵 死 者 の 如 し 、 マ リ ヤ は 墓

にたちて、なんぢのいさぎよきからだをたづね  
 立 爾 潔 體 尋

たり。なんぢはぢごくにいざなわれず  
 爾 地 獄 誘

して、ぢごくをとりこにし、いのちをた賜  
 地 獄 虜 生 命 賜

もうものとして、しよぢよにあいたまえり。  
 者 處 女 逢 給

しよりふくかつせししゅよ、こうえいは  
 死 復 活 主 光 榮

なんぢにきす。  
 爾 歸

【 神現祭のトロパリ 第1調 】

しゅよ、なんぢがバプティスマンにせんをうくると時  
 主 爾 洗 受 時

き、せいさんしゃのけいはいはあらわれた  
 聖 三 者 敬 拜 顯

り、けだしちちのこえなんぢをしょうして  
 蓋 父 聲 爾 證

しあいのことなづけ、せいしんもはとのかた  
 至愛の子名、聖神鳩の形  
 ちにあられてことばのたしかなるをしめ  
 顯言確示  
 せり、あらわ れてせかいをてらし  
 現 世界 照  
 しハスト スか みよ、こう えいはなんちにき  
 神 光 榮 爾 歸  
 す。

【 復活のコンダク 第6調 】

こう えいはちちとこ と せいしんにき  
 光 榮 父 子 と 聖 神 歸  
 す、  
 いのちのげんいたるハストか み はいのちを  
 生命 原因 神 生命  
 ほどこすてをも って しせしものをくらきた  
 施 手 以 死 者 のをくらきた 谷  
 によりいだし て、ふくかつをじんるいに  
 出 復 活 人類  
 たま えり、しゅうじんのきゅうせ いしゅ、ふ  
 賜 えり、衆 人 救 世 いしゅ、復

く かつ と い の ち 、 お よ び し ゅ う じ ん の か み な  
活 生 命 及 衆 人 神  
れ ば な り 。

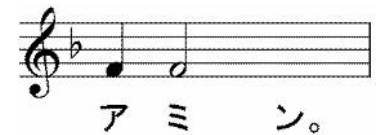
【 神現祭のコンダク 第4調 】

い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
今 何 時 世 世  
し ゅ よ 、 な ん ぢ は こ ん に ち せ か い に あ ら わ  
主 爾 今日 世界 現  
れ 、 な ん ぢ の ひ か り は わ れ ら に し る さ れ た  
爾 光 我 等 印  
り 、 わ れ ら な ん ぢ を う け み と め て う  
我 等 爾 承 認 歌  
た う 。 ち か づ き が た き ひ か り よ 、  
近 難 光  
な ん ぢ き た り な ん ぢ あ ら わ れ た ま え り 。

司祭) ( 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と  
なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、  
ねがものちえめいごあたつみおこなものすそのすくいためつうかい  
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行おう者を棄てずして、其救の爲に痛悔  
たわれらいやふとうなんぢしよぼくこときおいなんぢせい  
を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な  
さいだんこうえいまえたなんぢとうぜんふくはいさんえいたてまつたもの  
る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と

しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ  
 なしし主宰よ、爾 親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
 もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ  
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が 靈と體と  
 せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい しょう  
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生  
 しんぢょ こせい なんぢ よろこび な しよせいじん きとう よ  
 神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ  
 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世  
 に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる  
 聖 神 聖 勇 毅 聖

じょうせいのもものよ、われらをあわれめ  
 常 生 者 我 等 を 憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい  
 聖 神 聖 勇 毅 聖

なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ  
 常 生 者 我 等 を 憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
 聖 神 聖 勇 毅

せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ  
 聖 常 生 者 我 等 を 憐

れめよ。こうえいはちちとことせいしん  
 光 榮 父 子 聖 神

に き す、 い ま も い つ も よ よ 世 世 に、 ア ミ ン。  
 歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ、 わ れ ら を あ わ  
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ。 せ い な る か み、 せ い な る ゆ う  
 聖 神 聖 勇

き、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ、 わ れ ら を  
 毅 聖 常 生 者 我 等

あ わ れ め よ。  
 憐

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、 )

【 プロキメン 提綱 神現祭後の主日 第1調 及び神現祭 第4調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、我等爾を頼むが如く、爾の憐を我等に垂れ給え、

し ゅ よ、 わ れ ら な ん ち を た の む が ご と く、  
 主 我 等 爾 頼 如

な ん ち の あ わ れ み を わ れ ら に た れ た ま  
 爾 憐 我 等 垂 給

え。

誦經) <sup>ぎじん</sup>義人よ、<sup>しゅ</sup>主の爲に<sup>よろこ</sup>喜べ、<sup>さんえい</sup>讚榮するは<sup>ぎしゃ</sup>義者に<sup>かな</sup>適う、

しゅよ、われらなんぢをたのむがごとく、  
主我等爾頼如。  
なんぢのあわれみをわれらにたれたま給  
え。

誦經) <sup>しゅ</sup>主の名に依りて<sup>き</sup>來たる<sup>もの</sup>者は<sup>あがほ</sup>崇め讚めらる、<sup>しゅ</sup>主は<sup>かみ</sup>神なり<sup>われら</sup>我等を<sup>てら</sup>照せり、

しゅのなによりてきたるものはあがめほめら  
主名依來者は崇讚  
る。しゅはかみなり、われらをてらせり。  
主神我等照

【 <sup>アポストロス</sup>使徒經 224 半端 エフェス書 4 章 7~13 節  
280 半端 ティモフェイ前書 1 章 15~17 節 】

司祭) <sup>えいち</sup>睿智、

誦經) <sup>せいしと</sup>聖使徒パヴェルがエフェス人に<sup>じん</sup>達する<sup>しょ</sup>書の<sup>よみ</sup>讀、

司祭) <sup>つつし</sup>謹みて<sup>き</sup>聽くべし、

誦經) <sup>けいてい</sup>兄弟よ、<sup>われら</sup>我等各人に<sup>おんちよう</sup>恩寵の<sup>あた</sup>與えられしは、<sup>たまもの</sup>ハリストスの<sup>りよう</sup>賜の<sup>したが</sup>量に<sup>ゆえ</sup>循うなり。故  
に云えるあり、<sup>たか</sup>高きに<sup>のぼ</sup>登り、<sup>とりこ</sup>擲者を<sup>とりこ</sup>擲にし、<sup>ひとびと</sup>人人に<sup>たまもの</sup>賜を<sup>あた</sup>與えたりと。夫れ<sup>そのぼ</sup>登れりとは、  
<sup>かれ</sup>彼が<sup>まち</sup>先づ<sup>もつともした</sup>地の<sup>ところ</sup>最下なる<sup>くだ</sup>處に<sup>しめ</sup>降りしを<sup>あら</sup>示すに<sup>くだ</sup>非ずや。降りし者は、<sup>かれすなわちしょてん</sup>彼即諸天の  
上<sup>のぼ</sup>に登りし者なり、<sup>もの</sup>此れ<sup>こ</sup>萬有<sup>ばんゆう</sup>を<sup>み</sup>充たさん爲なり。彼が<sup>ため</sup>與えし者には、<sup>かれ</sup>使徒あり、<sup>あた</sup>預言者  
あり、<sup>ふくいんしゃ</sup>福音者あり、<sup>ぼくしおよ</sup>牧師及び<sup>きようし</sup>教師あり、<sup>せいと</sup>聖徒を<sup>ぜんび</sup>全備せしめ、<sup>つとめ</sup>服役の事を<sup>こと</sup>行い、<sup>おこな</sup>ハリス  
トスの<sup>たい</sup>體を<sup>た</sup>建てて、<sup>われら</sup>我等皆<sup>みなしん</sup>信と<sup>かみ</sup>神の子を<sup>こ</sup>識る<sup>し</sup>知識<sup>ちしき</sup>との<sup>いつ</sup>一なるに、<sup>せいぜん</sup>成全の<sup>ひと</sup>人と<sup>な</sup>爲るに、ハ  
リストスの<sup>まった</sup>全<sup>せいちよう</sup>き成長<sup>りよう</sup>の<sup>いた</sup>量<sup>およ</sup>に至るに<sup>およ</sup>迄ぶ。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ、キリストから賜わる賜物のはかりに従って、わたしたちひとりびとりに、恵みが与えられている。そこで、こう言われている、「彼は高いところに上った時、とりこを捕えて引き行き、人々に賜物を分け与えた」。さて「上った」と言う以上、また地下の低い底にも降りてこられたわけではないか。降りてこられた者自身は、同時に、あらゆるものに満ちるために、もろもろの天の上にも上られたかたなのである。そして彼は、ある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧師、教師として、お立てになった。それは、聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ、わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至るためである。

\*\*\*\*\*

誦經) <sup>こ</sup>子<sup>ティモフェイ</sup>よ、<sup>ハリストス</sup> イ<sup>イス</sup>スは<sup>ざいにん</sup>罪<sup>人</sup>を<sup>すく</sup>救<sup>わん</sup>ん<sup>ため</sup>爲<sup>よ</sup>に<sup>きた</sup>世<sup>に</sup>來<sup>たり</sup>たり、<sup>こ</sup>此<sup>しん</sup>れ<sup>信</sup>なる、  
<sup>まった</sup>全<sup>う</sup>く<sup>ことば</sup>受<sup>ざいにん</sup>く<sup>べき</sup>べき<sup>言</sup>なり、<sup>ざいにん</sup>罪<sup>人</sup>の<sup>うち</sup>中<sup>われ</sup>我<sup>だいいち</sup>第<sup>しか</sup>一<sup>わ</sup>なり。然<sup>あわれみ</sup>れ<sup>こうむ</sup>ども<sup>我</sup>が<sup>しん</sup>矜<sup>い</sup>恤<sup>を</sup>を<sup>ま</sup>蒙<sup>り</sup>しは、<sup>ハリストス</sup>イ<sup>ハリストス</sup>ス<sup>が</sup>先<sup>ま</sup>づ<sup>われ</sup>我<sup>おい</sup>に<sup>また</sup>於<sup>かん</sup>て<sup>にん</sup>全<sup>しめ</sup>き<sup>のち</sup>寛<sup>かれ</sup>忍<sup>しん</sup>を<sup>えいえん</sup>示<sup>いのち</sup>して<sup>え</sup>後<sup>を得</sup>ん  
<sup>ほつ</sup>と<sup>もの</sup>欲<sup>も</sup>する<sup>はん</sup>者<sup>な</sup>の<sup>ため</sup>模<sup>ねが</sup>範<sup>そんけい</sup>と<sup>こうえい</sup>爲<sup>ばん</sup>さん<sup>せい</sup>爲<sup>おう</sup>なり。願<sup>やぶ</sup>わ<sup>べ</sup>く<sup>は</sup>は<sup>尊</sup>敬<sup>と</sup>と<sup>光</sup>榮<sup>とは</sup>と<sup>は</sup>、<sup>萬</sup>世<sup>の</sup>王<sup>、</sup>壊<sup>る</sup>可<sup>から</sup>ら  
<sup>み</sup>ず<sup>べ</sup>見<sup>ど</sup>る<sup>く</sup>可<sup>いつ</sup>から<sup>え</sup>ざる<sup>かみ</sup>獨<sup>む</sup>一<sup>きゆう</sup> 睿<sup>よ</sup>智<sup>き</sup>の<sup>神</sup>に、<sup>無</sup>窮<sup>の</sup>世<sup>に</sup>に<sup>歸</sup>せん、<sup>ア</sup>ミ<sup>ン</sup>。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) わたしの子テモテよ。「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきて下さった」という言葉は、确实で、そのまま受けいれるに足るものである。わたしは、その罪人のかしらなのである。しかし、わたしがあわれみをこうむったのは、キリスト・イエスが、まずわたしに対して限りなく寛容を示し、そして、わたしが今後、彼を信じて永遠のいのちを受ける者の模範となるためである。世々の支配者、不朽にして見えざる唯一の神に、世々限りなく、ほまれと栄光とがあるように、アアメン。

\*\*\*\*\*

【 アリルイヤ 神現祭後の主日 第5調 及び神現祭 第4調 】

司祭) <sup>なんぢ</sup>爾<sup>へいあん</sup>に<sup>平</sup>安<sup>、</sup>

誦經) <sup>なんぢ</sup>爾<sup>しん</sup>の<sup>神</sup>にも<sup>、</sup>

司祭) <sup>えいち</sup>睿<sup>智</sup>、

誦經) <sup>しゅ</sup>アリル<sup>われ</sup>イ<sup>な</sup>ヤ<sup>なんぢ</sup>、<sup>じれん</sup>主<sup>うた</sup>よ<sup>わ</sup>、<sup>くち</sup>我<sup>もつ</sup>永<sup>よ</sup>く<sup>なんぢ</sup>爾<sup>しんじつ</sup>の<sup>つた</sup>慈<sup>を</sup>憐<sup>を</sup>を<sup>歌</sup>い<sup>、</sup>我<sup>わ</sup>が<sup>くち</sup>口<sup>もつ</sup>を<sup>よ</sup>以<sup>よ</sup>て<sup>なんぢ</sup>世<sup>しんじつ</sup>に<sup>つた</sup>爾<sup>の</sup>真<sup>を</sup>實<sup>を</sup>を<sup>傳</sup>え  
ん、





誦經) <sup>けだしわれい じれん なが た なんぢ なんぢ しんじつ てん かた</sup> 蓋 我言う、慈慈は永く建てられたり、爾は爾の眞實を天に固めたり、



誦經) <sup>かみ しょし しゅ けん こうえい そんき しゅ けん</sup> 神の諸子よ主に獻ぜよ、光榮と尊貴とを主に獻ぜよ、



司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ し</sup> 人を愛する主 宰よ、我が心に神を知る智慧の 淨き光を輝かし、我が思

<sup>ねん め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup> 念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる 誠

<sup>おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ</sup> を畏るる 畏をも入れて、我等が 悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ

<sup>ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ</sup> 所を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神

<sup>なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん</sup> よ、爾は我が 靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善

<sup>いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ</sup> にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。 )

【 <sup>エヴァンゲリオン</sup> 福音經 <sup>マトフェイ福音書</sup> 8 端 4 章 12~17 節  
ル <sup>カ福音書</sup> 93 端 18 章 35~43 節 】

司祭) <sup>えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん</sup> 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) <sup>でん せいふくいんけい よみ</sup> マトフェイ傳の聖福音經の讀、





司祭) 謹みて聴くべし、彼の時イイスはイオアンが囚われたりと聞きて、ガリラヤに去れり、ナザレを離れて、ザヴロン及びネファリムの境の内なる海濱のカペルナウムに來りて、此に居りたり、預言者イサイヤを以て言われしことに應うを致す、曰く、ザヴロンの地、ネファリムの地、海濱の路にイオルダンの外に在る異邦のガリラヤ、幽暗に坐する民は大なる光を見、死の地及び蔭に坐する者に光は輝けりと。是よりイイス始めて教を宣べて曰えり、悔改せよ、蓋天国は邇づけり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) イエスはヨハネが捕えられたと聞いて、ガリラヤへ退かれた。そしてナザレを去り、ゼブルンとナフタリとの地方にある海への町カペナウムに行き住まわれた。これは預言者イザヤによって言われた言が、成就するためである。「ゼブルンの地、ナフタリの地、海に沿う地方、ヨルダンの向こうの地、異邦人のガリラヤ、暗黒の中に住んでいる民は大なる光を見、死の地、死の陰に住んでいる人々に、光がのぼった」。この時からイエスは教を宣べはじめて言われた、「悔い改めよ、天国は近づいた」。

\*\*\*\*\*

司祭) 彼の時イイス、イェリホンに近づける時、或警者道の旁に坐して乞えり。民の過ぐるを聞きて、是れ何事ぞと問えば、人人彼にイイスナザレの過ぐるなりと告げたり。彼呼びて曰えり、ダヴィドの子イイスよ、我を憐め。前に行く者彼を禁めて黙さしむれども、彼愈大に呼べり、ダヴィドの子よ、我を憐め。イイス止りて、彼を攜え來るを命じ、其近づきし時、之に問いて曰えり、我が爾に何を爲さんことを欲するか。彼曰えり、主よ、我が見るを得んことを。イイス彼に謂えり、見るを得よ、爾の信は爾を救えり。彼直に見るを得、神を讚榮して、イイスに従えり。衆民是を見て、讚美を神に歸せり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) イエスがエリコに近づかれたとき、ある盲人が道ばたにすわって、物ごいをしていた。群衆が通り過ぎる音を耳にして、彼は何事があるのかと尋ねた。ところが、ナザレのイエスがお通りなのだと言われたので、声をあげて、「ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんで下さい」と言った。先頭に立つ人々が彼をしかって黙らせようとしたが、彼はますます激しく叫びつづけた、「ダビデの子よ、わたしをあわれんで下さい」。そこでイエスは立ちどまって、その者を連れて来るように、とお命じになった。彼が近づいたとき、「わたしに何をしてほしいのか」とおたずねになると、「主よ、見えるようになることです」と答えた。そこでイエスは言われた、「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを救った」。すると彼は、たちまち見えるようになった。そして神をあがめながらイエスに従って行った。これを見て、人々はみな神をさんびした。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
 主 光 榮 爾 に き 歸 し、 光 榮

はなんぢにきす。  
 爾 に き 歸 す。

※ 聖体礼儀③ (金ロイオアン) へ

※ 下の歌「早課第九歌頌イルモス」を歌える場合は聖変化後の「常に福にして」に替えて歌う。

わ が た ま し い や て ん ぐ ん よ  
我 靈 天 軍

り と う と き ど う て い ぢ よ  
尊 う 童 貞 女

し じょ う な る しょ う しん ぢ よ  
至 淨 う 生 神 女

を あ が め ほ め よ  
崇 讚

しょ う しん ぢ よ や なん ぢ の く ら い に か な い て よ く  
生 神 女 爾 位 適 能

な なん ぢ を さ ん び す る の し た な し  
爾 讚 美 舌

て ん じょ う の ち え も い か に なん ぢ を か しょ う す る  
天 上 智 慧 如 何 爾 歌 誦

を し ら ず た だ なん ぢ じ ん じ の も の と し て  
知 唯 爾 仁 慈 者

わ れ ら の し ん を う け た ま え わ れ ら の ね っ  
我 等 信 受 給 え 我 等 熱

せ つ な る あ い を し れ ば な り け だ し  
切 愛 知 蓋

な なん ぢ は ハ ス テ ア ニ ン ら の て ん た つ な り  
爾 等 轉 達

わ れ ら な urchi を あ が め ほ む  
我 等 爾 urchi を 崇 め 讚 む